研修便り

高知市教育研究所教職員研修班
平成26年１月30日発行　　No.40

公開授業研修

平成25年12月９日（月）実施
全体講師：京都光華女子大学　加藤　明　副学長

対象：高知市立秦小学校教職員，高知市立学校参加希望教員

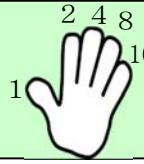
目的　指導力の高い優れた指導者による授業を参観し，魅力ある授業を創るため授業力の向上を図る。

研修Ⅰ　公開授業「数当てカードをつくろう」（第６学年算数科）

授業の見どころ
- 教材の面白さ
- 教材構成の巧みさ

【学習の展開】

Ⅰ　１，２，４，８，16の５つの数を組み合わせて１から31までの数をつくる。



「親指を１，人差し指を２，では中指は？，小指は？」と，数が倍になっていくことに気付かせながら，親指から小指までの数を１，２，４，８，16と決める。

１なら親指，２なら人差し指，３なら親指と人差し指を折っていくというように指を使って，１から31までの数をつくる。

指を使って表した数の例

１＋８＋16＝25

１＋４＋８＋16＝29

Ⅱ　１から31までの数を当てることのできる数当てカード（誕生日当てカード）の秘密を探る。

○　誕生日当てカードを使って，数の当て方の秘密を考える。
- 自分の誕生日が，下の５枚の，どのカードに書かれてあるかを子どもたちに尋ねていく。

A

1	3	5	7	9	11
13	15	17	19	21	23
25	27	29	31		

B

2	3	6	7	10	11
14	15	18	19	22	23
26	27	30	31		

C

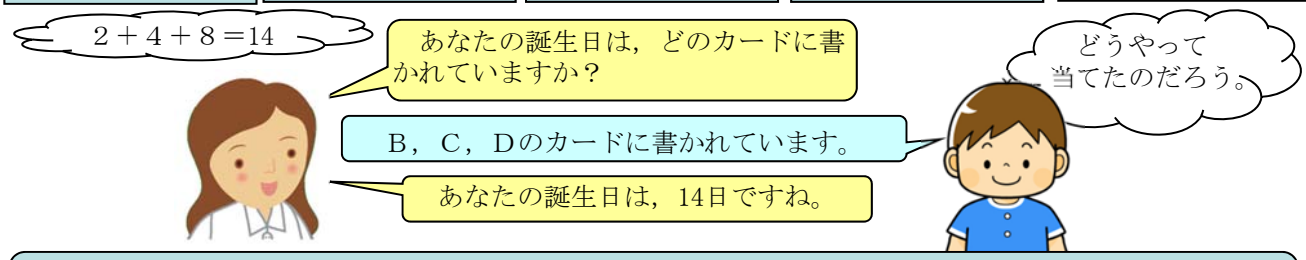
4	5	6	7	12	13
14	15	20	21	22	23
28	29	30	31		

D

8	9	10	11	12	13
14	15	24	25	26	27
28	29	30	31		

E

16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27
28	29	30	31		



誕生日が書いてあると答えたカードの最初の数（カードの左上隅）の和が答えであること，さらにそれは指を折ってつくった１から31までと同じ考えでできていることに気付かせる。

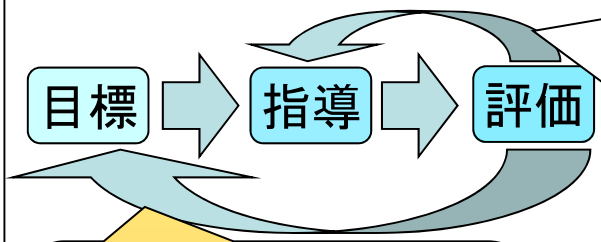
Ⅲ　誕生日当てカードの当て方を支える考え方を用いて，数当てカードをつくる。

○　５枚のカードを準備し，どのカードにどのような数を書けば，数当てカードをつくることができるかを考えさせる。
○　出来上がったら，友だち同士で「当てっこ」を楽しむ活動を通して，カードが正しくできているかどうかを確かめさせる。

【授業のポイント】
○　「数を当てる時は５枚のカードを使うが，つくる時は４枚」「誕生日を誕生月にする」といった発達段階に合わせた工夫をすれば，どの学年でも実施することができる。
○　楽しく，何度も活動している間に見えなかったものが見えてくる。そのため，ゆったりとした活動をさせてあげることが大切である。
○　算数・数学科は，計算だけではない。「ものの見方・考え方」も大切である。その力をつけるためには，多少背伸びをした課題を与え，挑戦させる必要がある。

研修Ⅱ　講話「小中一貫教育の課題と展望　－目標と指導と評価の一体化に立って－」

1　目標と指導と評価の一体化



結果に責任をもつために

○　評価は指導してきた成果を確かめるためにしている。
○　児童生徒は，私たちが期待しているほど，理解していないことを前提におく。
○　理解していないことがあれば，教え直しをしなければいけない。
○　できるだけ評価をして，小刻みに教え直しをし，最後にはできるようにもっていかなければならない。

つけようとしていない力はつかない

○　つけたい力が明確にあって，そのつけたい力を効果的につけるために授業が展開される。その成果をみとるのが評価である。
○　子どもの実態をみて，弱い力を目標にし，つけるための指導をしなければならない。

この単元で・・・

「どんなことが分かればいいの？」
「どんなことができればいいの？」
「どんな見方や考え方が育てばいいの？」
「どんな表現力がつけばいいの？」
「どんな関心・意欲・態度が高まればいいの？」

あらかじめ設定を

2　一貫・連携教育の方策

【現状】

【スタートカリキュラム】

○　スタートカリキュラムは，小学校側から考えて作られており，年長時の実態とのずれがあるものが多い。

【小中一貫カリキュラム】

○　学習指導要領は，小中一貫を見通して作成されていない。そのため，目標と内容を見直した，小中一貫カリキュラムを見て，授業ができるほど，成熟している教師は多くない。

【指導法の違い】

○　小学校での指導は，これまでに学習したことを活用し，新たに知識として教えることを基本としている。
○　中学校は，高校入試も視野に入れなければならないため，知識の量が多い。そのため，どうしても知識が重視されてしまう。

就学前教育のキーワードは「受け入れる」「受け止める」「共感する」「支える」である。このような思いを受け止めて，どのような指導ができるかということを考えながら作成する必要がある。

「自学力」〔自分で壁（困難）を乗り越えていけるような学習の力〕の育成をする必要がある。

3　成長保障（育ち）の連続性のために

⑴　積極性を育てているか

学級の積極性が育っているということは，それを支える許容性・寛容性が育っているということである。例えば，手が挙がるということは，間違った時に，その発言を受け止める他の子どもが育っていることである。

⑵　学習規律を身に付けているか

学習規律が身に付くと，学力向上への力がつく。そして，幼さから脱皮させることができる。

⑶　褒め上手・励まし上手・叱り上手であるか

教師がそれぞれの子どもに向ける眼差しが，子ども同士の眼差しになって，クラスの雰囲気が決まってくる。（隠れたカリキュラム）

【子ども・受講者の感想】

- 私は，昨日この授業をして，数字が好きになったと思います。そして，またこんな授業を算数だけでなく他の科目でもやってみて，算数が好きになったように，他の教科ももっと好きになりたいです。
- 自分も児童になったように参加できた。また，研修したことがそのまま学級の児童にやれる内容であったため，とても嬉しく思った。驚きのある授業だと，子どもたちの目も輝くのだと改めて実感した。
- 継続的・連続的な教育の必要性を感じた。子どもたちは，明らかに10年前とは変わってきている。生活を見つめ直し，新たな取組というより，足元を固める取組を万事徹底していきたい。